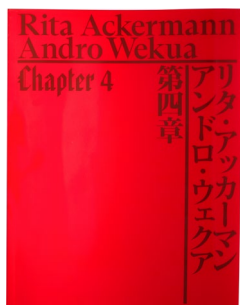


リタ・アッカーマン & アンドロ・ウェクア : Chapter 4

ファーガス・マカフリー 東京

2021年5月1日～7月3日



ファーガス・マカフリー東京はリタ・アッカーマン、アンドロ・ウェクアによる二人展を開催します。長年にわたる同志、時にはコラボレーター、そしてそれぞれが確立した強いパーソナリティーを持つ作家が集い、2人の間で20年以上にわたって続けられるインスピレーションとクリエイティビティーの対話を明らかにします。

2人はソヴィエト理想主義の崩壊、体制下における抑圧、祖国からの亡命、移民としての経験を共有しています。リタ・アッカーマンとアンドロ・ウェクアはともに1990年代に東側諸国を去り、異国での創作活動を始めます。アッカーマンの作品にはハンガリーでの時間を連想させる要素はあまり見られず1980年代から今に至るまでのアメリカでの体験が色濃く見られます。それに対してウェクアの作品からは、現実か想像かがはっきりしない謎めいた過去への憧憬が感じられます。

ゲオルク・バゼリッツやジグマー・ポルケと並び、民話やおとぎ話からの引用、ハイ・ローカルチャーの混在、統率のとれたリアリズムと触覚的で魅惑的なアメリカのジェシュチュアルな抽象表現の間を突き進む道を切り開いた「東部」アーティスト勢に、アッカーマンとウェクアは数えられます。また同じくヨーロッパから亡命し、具象表現、風景画、純粋な抽象表現の中に物質的、精神的な効果を生み出したウィレム・デ・クーニング、マーク・ロスコとの関連性は言うまでもありません。

ウェクアの作品制作は動物、ヤシの木、物思いに沈む青年、見放された場所のイメージのカラーージュから始まり、それは徐々にロスコの色使いを彷彿とさせる鮮やかなピンク、紫、アシッドイエロー、ターコイズ、マゼンタの層の下へと消え、変容していきます。彼の一目活気に満ちた色彩には、先人の作家達のそれと同じく、矛盾する必死さ、絶望が結びついています。多くは具体的な場所と時間の記憶から生まれる個人的な作品ですが、イメージの持つ断固とした曖昧さは、そこに普遍性を与えています。過去の巨匠による作品と大きさ、技法は異なりますが、その両方は極度の緊張と、あがきを観るものを感じさせます。表面を削り落とされダメージを与えられた作品からは、重厚な物質性と意味を見るものに突きつけます。

彼の最も強い関心である肖像画、自画像は、疎外感と思慕の念をささやいているかのようで、見るものに不安感を与えます。人物画にあるはずの「確かさ」は失われており、アイデンティティはいくつもの要素が混ざり合っているように多義的で、曖昧さを内包し、意味が置き換えられ、明白な真実は回避されています。

アッカーマンの作品も同様に、層が重なり、イメージはコード化され、元になった既存のイメージが鑑賞者にさらされています。多くの場合、そこには相反する要素が共存しているように映るのは、無遠慮な好奇心目と監視に対する自己防衛が反映されているからなのかも知れません。「Do's and Don'ts (すべきこと、すべきでないこと)」とタイトルづけされた作品群(2008-2009年)では、彼女はまず雑誌、本のコピーに掲載されるモンタージュの切り抜きでキャンバスを構成し、そこにグラフィットとオイルクレヨンによる線、シルエット、テクスチャーを足していくことで引用されたイメージと彼女自身の生み出したイメージとの境目をあやふやにしていきます。過去15年間

彼女の作品に登場する女性（少女）たちはシリーズ名でもある「Nurses」「Sisters」「Mamas」にグループ分けされ、その肩書きを反映し、従い、反発し、そして時には女性らしさという空虚なステレオタイプを無視してきました。作品に登場する女性たちはアッカーマン自身にとってもよく似ていますが、大きな瞳の漫画のキャラクターに置き換えられた「彼女(she)」は謎めいた静けさと無口さをたたえています。アッカーマンは自由に手で直接絵の具を配し、大胆にオイルスティック使い、チョークで曲がりくねったドローイングを描いて、現実と非現実が織りなす不協和音のレイヤー上でジェスチャーを繰り広げていきます。



2002年、共通の友人であったジャンニ・ジェッツァーの紹介を通して、とても似たマインドを持つ2人は出会い、それはすぐにコラージュやドローイングをFAXで送り合うやりとり、ジン

「Chapter1」の自費出版、その後「Chapter2」「Chapter3」のNieves（スイス）からの出版へと発展していきます。写真、音楽、詩、日常会話に

触発される二人は、電話、留守番電話、携帯のメッセージ、Eメール、画像の交換など様々な方法を通して離れた相手へのコミュニケーションを行います。それはまるで物理的な距離がより、二人が似通ったイメージや出来事に心を惹かれるということを強調しているかのようです。本展で展示される作品は2008年から今年に制作された絵画とコラージュ作品ですが、アッカーマンとウエクアは初めて出会うそのずっと前から共通した理解、解釈を持っていたのです。作家たちの間で21世紀に交わされたやりとりが東京で形となるのを、本人たちが直接見ることは叶いませんが、本展をご覧いただくみなさまには二人の作品群が強く共鳴することを体感いただけるでしょう。



本展に合わせ、アッカーマンとウエクアの共作アートブック「Chapter4」が出版となります。（日英バイリンガル、Fergus McCaffrey / Case Publishing 共同出版）また青山のSKWAT/twelvebooksにて両作家の貴重な絶版書籍を含めたカタログ展示を予定しています（詳細後日発表）。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。2019～2021年は、マシュー・バーニー、キャロリー・シュニーマン、白髪一雄、ジャスパール・ジョーンズ、マーサ・ユングヴィルト、リチャード・セラら個展を含めた、多様なプログラムを展開しています。

プレスに関するお問い合わせ：

電話: +81 (0)3 6447 2660

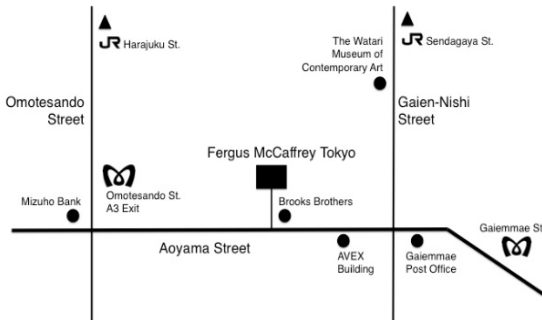
メール: tokyo@fergusmccaffrey.com

来場者様へのお知らせ：

ファーガス・マカフリー 東京では政府のガイドラインに沿った感染防止対策を行います。ご来廊いただく際は、マスクをご着用いただく事、また中にお入りいただく際にアルコールで手指消毒をお願い申し上げます。正面入口にて、スタッフより非接触検温機にて体温測定のご協力をお願いすることと致します。万が一の際連絡を差し上げられるよう、ご連絡先の記入をお願い致します。スペース内の利用に関して、1度にご来場いただける人数を4名までとさせていただきます。最後に、発熱や咳などの症状がある場合はご来廊をご遠慮頂きますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

Map:

(表参道駅 A3 出口)



Images:

1. *Rita Ackermann and Andro Wekua: Chapter 4*, 2021 (cover); published by Fergus McCaffrey, New York, Tokyo, St. Barth, and Case Publishing, Tokyo, Rotterdam
2. Left to Right: *Chapter 3*, 2004 (cover); published by Nieves, Switzerland; *Chapter 2*, 2004 (cover); published by Nieves, Switzerland; *Chapter 1*, 2002 (cover)
3. *Rita Ackermann and Andro Wekua: Chapter 4*, 2021 (cover); published by Fergus McCaffrey, New York, Tokyo, St. Barth, and Case Publishing, Tokyo, Rotterdam